

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



たわわの杏 (アズ) 大豊作!



○サクランボにピワにウメにアズ・どれも美味しく実りました。中でも大豊作のアズは「あまりくちなあれ!」のおまじないで、とても甘くて美味しいシロップやジャムになりました!

中3生が保育の学習 (家庭科) で

今、附属中学校の3年生が、年中さんと「保育」の学習で交流しています。中学生が子どもたちを見つめる眼差しは、とても慈愛に満ちていて、見守る私たちの心を温かくしてくれます。中学生と言えば、家族に守られ「育てられる立場」から、近い将来家族を持ち、「育てる立場」になるであろう転換点に立っている存在です。小さい頃の自分と重ねたり、将来の自分を思い描いたりしながら幼稚園児と触れ合うことには、とても大きな意味があるようです。密接に、幼中の交流が持てるのは附属の素晴らしい強みですね。



火のないところだ。

附属幼稚園先生方は、子どもの心に火をつけるのがとても上手だ。「(心に)火のないところ」に学びはない! (B.Y.石川) どの「遊び」も「体験」も、いやいやさせられるのではなく、それはもう「遊び」ではないし、そこに「学び」など決して生まれはしない。「こんなことしたくないな」と思っている子の頭の中は「止めたいな」「違うこと」がしたいなで一杯。大人が仕方なく講演会に参加し、興味のない話を聴いても「早く終わらないかしら。」と考えているのと同じことだ。だから、「子どもの心に火をつける」「その気にさせる」ことは決定的に保育の質を左右する。

例えば、年長クラスの先生方のやり方はこうだ。まず、子どもの興味をそそるものに意図的に出合わせる。そして反応を見る。何人かが、目をキラキラさせて「やってみよう!」「こんなことしよやよ!」と食い付いてくる。上手いのはここからだ。すぐに、「じゃあ、やろう。」なんて言わない。むしろ、クールに「えー、無理じゃない?」だって・・・と待たせたり、条件をつけたりするのだ。ダメだ、無理だと言われれば、さっきまで他人ごとのように構えていた子どもまでもがブライドをくすぐられて黙ってはいない。「こうすればできるんじゃない?」と前のめりになってくる。子どもたちに充分意見を出し合わせ、気持ち揃って来た頃合いを見計らって、「じゃあ、やってみよう。」と初めてゴーサインを出すのである。それはまるで、子どもたちの心の火が、先生方の超絶テクニックによって、じわじわと燃え広がり、学級全体が一つの目標に向かって燃え上がるかのようである。

その後、時には、何らかの要因で火の勢いが弱まることや、火が分裂しそうになることがある。先生方は、当然想定している。そんな時は、もう一度火力を強めるような「環境」や「援助」を用意し、より深く価値のある「遊び」へと導くのだ。

附属幼稚園のこのような保育を見た時、小学校の「生活科」や「総合的な学習の時間」の授業を思い出す。これらもまた、子どもたちの心に火が燃えていることが、他のどんな教科よりも大事だった。子どもたちの心に火をつけ、燃え続けさせることが、どんなに難しいか、身に染みて知っている。これからは、幼小の先生方が、授業(保育)レベルで学び合う時代かも知れない。

